

第2章 被災からの復旧の取組事例

第3節 2016年熊本地震（隣接市の社会福祉法人による支援）

地震を超えて共に生きる

社会福祉法人愛隣館所長、内閣府障害者政策委員会副委員長

三浦貴子

この原稿は、2017年1月27日（主任研修、国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局、2017年11月13日（Academic Workshop: Disaster & Crisis, IASSIDD 4th Asia Pacific Regional Congress, Bangkok, Thailand）、11月16日（Workshop for Disaster Risk Reduction at Special Elementary Schools、タイ教育省）の講演記録から編集しました。



図1 著者、三浦貴子

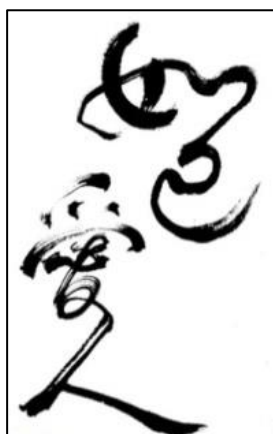


図2 愛隣館の理念

1 愛隣館

愛隣館は、2016年の熊本地震で最も被害が大きかった熊本市の北に位置する山鹿市にあります。巻頭の地図に山鹿市と熊本県を示しました。山鹿市の人口は53,000人です。地震による被害の少なかった愛隣館は支援拠点施設となり、①福祉避難所の開設、②物資供給、③人的支援、④リフレッシュ支援事業、⑤仮設住宅での継続的な支援などを行いましたので、紹介します。また、愛隣館の避難計画と防災訓練についても、ご紹介します。

愛隣館は1988年に障害者支援施設として開始されました。利用者の多くは肢体不自由と知的障害との重複障害です。入所施設、短期入所、デイケア、ホームヘルプ、グループホーム、就労移行支援なども運営しています。

法人の理念は、図2と3に示したように「己の如く、汝の隣人を愛すべし」です。図4のように、創立以来、事業を追加して、児童養護施設「愛隣園」、高齢者施設「愛隣荘」と「愛隣の家」の4つの施設による法人愛隣園となり2010年10月創立60周年を迎え、利用者450名を越しました。世界中、特にアジアの国から研修生を受け入れています。

図5には、事業種別ごとの利用者数と職員数を示しました。職員総数は112名で、そのうち、障害のある職員は8名、給食職員は7名です。

図3 愛隣館の理念と実践目標

=====

理念：己の如く汝の隣人を愛すべし
 併設：児童養護施設愛隣園（S.25）
 軽費老人ホーム愛隣荘（S.59）
 特別養護老人ホーム愛隣の家（H.5）

実践目標：
 1 あきらめない支援
 2 ことわらない支援
 3 丁寧で安定した個別支援

=====

図4 愛隣館の歴史

=====

私たちの歩み【事業所概要】
 所在：熊本県山鹿市津留 2022 TEL:0968-43-2771
 経営主体：社会福祉法人愛隣園
 種別：障害者支援施設
 開設：S.63.4.1
 事業：S.63 障害者支援施設〔施設入所・生活介護〕（生活サービス部）
 指定短期入所事業所（ショートステイ部）
 H.2 指定生活介護事業所（デイケア部）
 H.11 多機能型事業所〔生活介護〕（愛隣倶楽部）
 H.15 居宅介護事業・重度訪問介護事業・行動援護事業（ホームヘルプ部）
 地域活動支援センターⅡ型（まちなか交流サロンぴあぴあ）
 H.18 指定相談支援事業所（計画相談・障害児相談・地域移行・地域定着）
 日中一時支援事業（ショートステイ部）
 H.19 多機能型ホーム〔共同生活援助・福祉ホーム〕（ぴあハウス）
 H.23 多機能型事業所〔就労移行支援〕（ぴあワーク）

=====

図5 愛隣館のサービス概要

=====

サービス概要(2017年10月1日現在)
 スタッフ総数 112名（障害のあるスタッフ8名、調理スタッフ7名を含む）
 サービスエリア：山鹿市（人口53,000人）とその近郊

サービス種別利用者 利用者	サービス種別利用者 定員利用者 現員利用者	サービス種別利用者 定員利用者 現員利用者	サービス種別利用者 定員利用者 現員利用者	サービス種別利用者 定員利用者 現員利用者
愛隣館（施設入所支援）	70	71	60.5	常勤：57
短期入所	6	48	40.2	（管理・事務・看護・ ケアスタッフ等）
日中一時支援事業		19	25.2	
多機能型 愛隣倶楽部 生活介護	20	26	43.4	常勤：9
ぴあワーク（就労移行支援）	6	1	40	パート：3
デイケア部 生活介護	20	51	65.1	常勤：6 講師：3
地域活動支援センター	10	33	47.9	常勤：1 パート：4
ホームヘルプ部	—	39	57.1	常勤：6 登録：15
多機能型ホーム	15	15	58.8	常勤：1 パート：6
相談支援事業	—	200*	—	パート：4
移動支援事業	—	2	—	

=====

2 福祉避難所の開設

2016年の熊本地震では、大きな二つの揺れが記録されました。本震はマグニチュード7.0で、4月16

日1時25分に起こりました。4月14日21時26分の前震はマグニチュード6.2でした。2つの地震により死者50名、負傷者3,000名、避難者は44,000名を超えました。最も被害が深刻だった益城町では家屋が倒壊し、天井が崩落して使用できなくなった障害者入所施設と障害者通所施設もありました。



図6 愛隣館に開設した福祉避難所

前震の4月15日から安否確認をした後、本震のあった4月16日から複数の福祉避難所が開設されました。図6の2枚の写真は愛隣館内に設営した福祉避難所です。図7の写真は、熊本県身体障がい者福祉センターに開設された福祉避難所の身体障害者の部屋で、段ボールベッドを設置しています。図8の写真は、益城町の避難所で、日本災害リハビリテーション支援協会 JRAT からいただいたマットレスを敷いたところで、右側の写真は段ボールテーブルを使っているところです。



図7 熊本県身体障がい者福祉センターに開設された福祉避難所



図8 益城町の避難所

3 物資供給

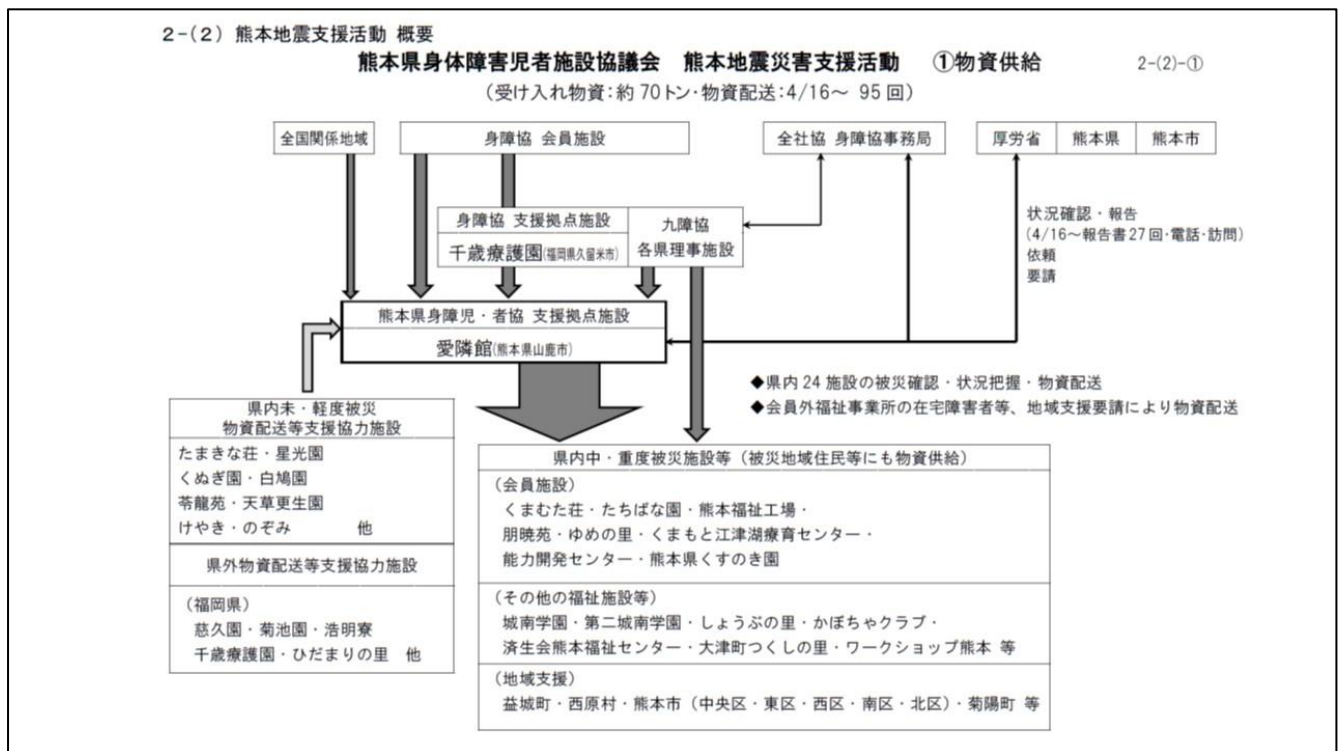


図9 熊本県身体障害児者施設協議会 熊本地震災害支援活動での物資支援

図9には、物資供給の概要を示しました。全国から寄せられた物資を、身体障害者施設協議会会員施設だけでなく、被害の大きかったその他の福祉事業所や被災地域の住民にも供給しました。その際の配送は愛隣館と被害の軽微だった熊本県内の施設や九州の施設が協力して当たりました。4月16日から約3ヶ月間、計95回、約70トンを届けました。図10の写真の10トントラックは、愛隣館で栽培しているミカンの収穫に使っているものです。

4月19日からは、施設や熊本の障害者の状況を、いくらかでも、国・県・市の行政と共有する目的で、報告メールを始めました。8月12日まで27号を発送しました。



図10 物資運搬の様子

4 人的支援

人的支援は、九州身体障害者施設協会と連絡・調整を図りながら、施設の被害や被災した職員の多かった「くまむた荘」へ応援職員を3ヶ月派遣しました。また、図11の右の下向き矢印は、厚生労働省による福祉人材派遣マッチングで、福祉避難所になった「熊本県能力開発センター」が支援を受けたことを示します。

そのほかに、温泉入浴と昼食支援、洗濯代行を組み合わせた温泉リフレッシュ支援事業を実施し、4月末から7月末まで延べ2,400名が利用しました。これは、地震発生後1週間くらいから、入浴と洗濯のニーズが高くなったことから企画したものです。避難所では入浴も洗濯もできず、銭湯に並ぶことは、障害者だけでなく、高齢者や乳幼児にも難しかったからでした。

熊本市や益城町などの6つの避難所と被災した1グループホームから、毎週水曜日と土曜日に、50名ずつをバスで送迎しました。市社協、山鹿温泉観光協会、経済振興委員会、九州身体障害者施設協議会と共に実行委員会形式で、支援金を持ちより組み立てました。山鹿温泉リフレッシュ支援事業は、市内六ヶ所の旅館・ホテルの大浴場と食事会場を借り、山鹿市食堂組合、飲食店組合の各協力店が昼食を提供しました。送迎を旅館や福祉施設で行い、入浴介助だけでなく洗濯代行などのサービスを施設スタッフ213人と市ボランティア連絡協議会等207人で担いました。避難者は入浴だけでなく、買い物と会話を楽しみ、最後は身内のようななじみの関係が生まれたように感じています。

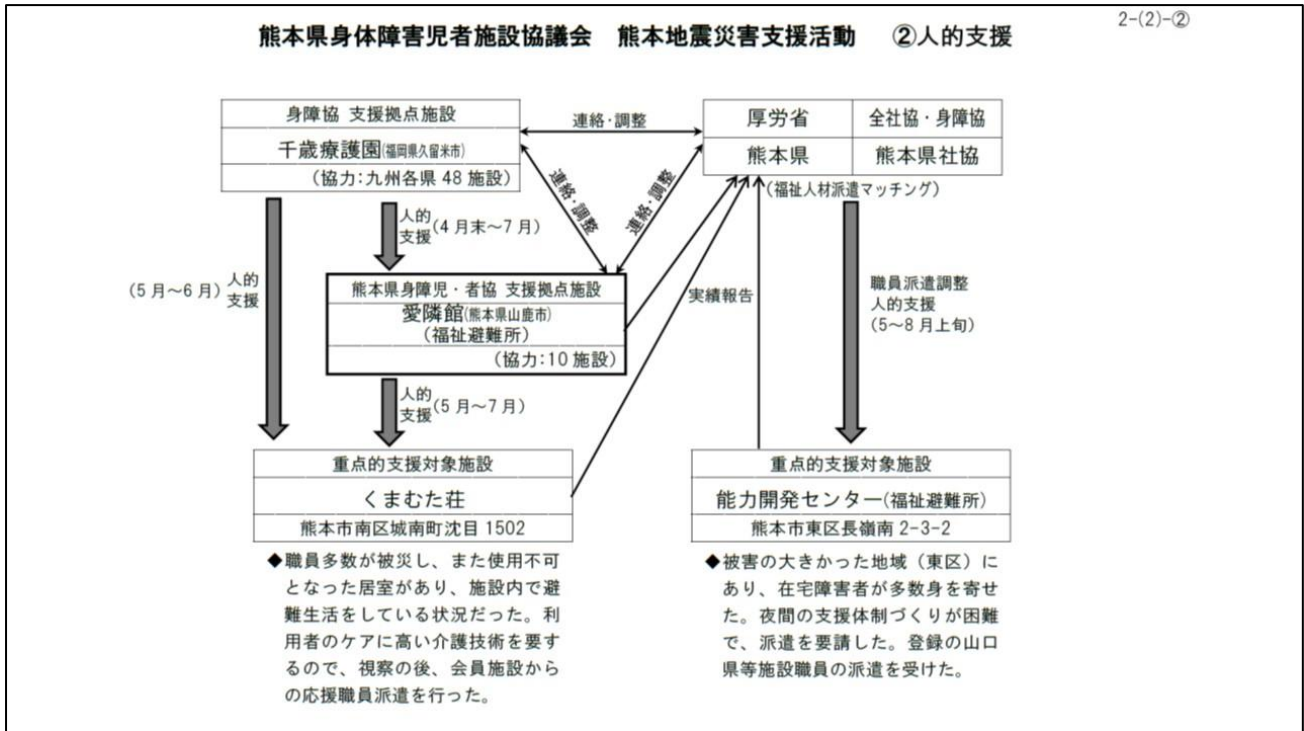


図 11 熊本県身体障害児者施設協議会 熊本地震災害支援活動での人的資源

5 山鹿温泉リフレッシュ支援事業

図 12 愛隣園による被災地域入浴等支援「山鹿温泉リフレッシュ支援事業」

社会福祉法人 愛隣園 障害者支援施設愛隣館 熊本地震災害支援活動 被災地域入浴等支援「山鹿温泉リフレッシュ支援事業」

- ・ **ニーズ**： 発災から1週間、避難所や被災グループホーム等で入浴のニーズは切実だった。また、断水のため洗濯ができずに困っている人々が多かった。
- ・ **地域連携で事業化**： 被害の軽かった山鹿市では、温泉資源を使った支援ができないかと考える市観光協会（ホテル等）、飲食店組合等の有志がおり、市社協と山鹿市からも協力の意向が伝えられたので、福祉支援拠点の愛隣館がコーディネートして、実行委員会方式で「山鹿温泉リフレッシュ自演事業」を計画した。九州身体障害児者施設協会からも支援協力も頂くこととなった。
- ・ **対象**： 被災した人々（高齢者、障害者、乳幼児を含む）と被災地支援者
- ・ **構成団体**： 1）山鹿市社協（山鹿市ボランティア連絡協議会）、2）山鹿温泉観光協会、3）山鹿経済振興委員会
4）山鹿市飲食店組合・山鹿市食堂組合、5）社会福祉法人 愛隣園、障害者支援施設 愛隣館（九州身体障害児者施設協会）
- ・ **予算**： 150万円（市社協60万円（市助成）、山鹿温泉観光協会、山鹿経済振興委員会、社会福祉法人愛隣園が30万円ずつ支援金を持ち寄る）
- ・ **実施期間**： 2016年4月30日～7月31日、毎週水曜・土曜 各25名ずつ2団体、50回試行
利用者：延べ2400名、支援協力者：法人職員 213名、ボランティア 270名
- ・ **実施内容**： 1）避難所等への送迎（毎回2か所へマイクロバス2台使用）
2）昼食支援（飲食店仕出し）
3）温泉入浴支援（ホテルにて） ※車いす利用者は施設に送迎し、機械浴などで入浴支援を行った。
4）洗濯代行
5）買い物、見学等支援
6）話し相手、レクリエーション



図13 温泉リフレッシュ支援事業の様子

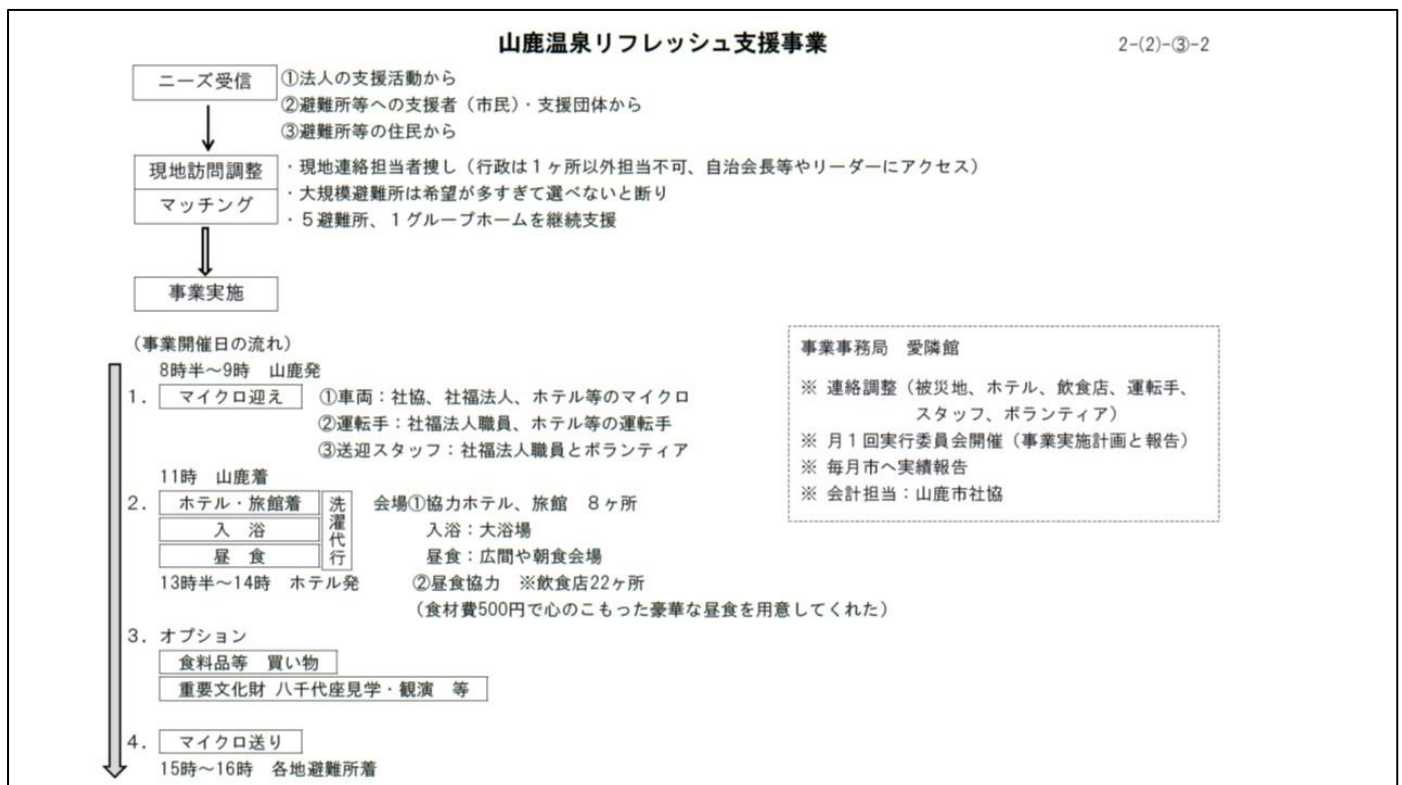


図14 山鹿温泉リフレッシュ支援事業

温泉リフレッシュ支援事業について、図13の左の写真はバスでの送迎、右は昼食の一例です。図14の上部は、この事業が実現するまでの経緯を、下部は1回のタイムスケジュールを示しました。熊本日日新聞（2016年5月17日）には、この温泉リフレッシュ支援事業が取り上げられました。

6 設住宅での支援活動



図15 仮設住宅での移動美術館

避難所から仮設住宅に移った方々へ支援は2017年春のとんかつ差し入れまで継続しました。図15の写真上に示したのは、移動美術館で、13名の障害のある芸術家による50作品を、2か所の仮設住宅（木山、益城）の集会所で展示しました。写真下は2016年12月の写真です。同時に行った炊き出しでは、牛丼200食、栗ぜんざい200食が15分で完売しました。仮設団地でのアールブリュット移動美術館は、2017年の冬には、熊本市城南町のみんなの家で行いました。



図16 仮設住宅での移動美術館へのゲスト

この時は、くまもんも来てくれましたし（図16）、日本の若手現代美術家30名に選ばれた山鹿市の障害のある二人も実演してくれました（図17）。手前の松本寛庸さんは色鉛筆の作品を描くときに使う下敷きとして、熊本地震の本震が報道された4月17日の新聞を使っていることを、この時に、気付きました。図17右の写真は松本さんの作品のひとつです。

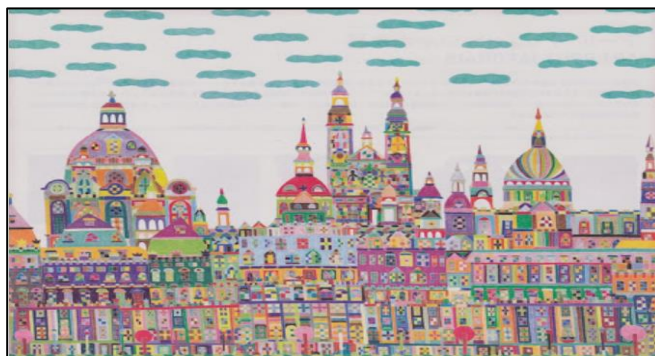


図 17 松本寛庸さんと色鉛筆の作品



図 18 テレビに取材される移動美術館

移動美術館については、テレビでも（図 18）、熊本日日新聞（2016年12月18日、2017年1月14日）でも紹介されました。

7 愛隣館の避難マニュアル

(1) 台風・大雨・河川洪水・土砂災害編

施設では防災マニュアルは実態に即して改訂しているところです。台風などの予報がある場合について、図19に示しました。まず職員研修でのグループ討議、グループ発表。その意見をもとにリーダー職員が原案を作成し管理者が校正後、意見交換をして案にまとめました。それから、利用者への説明を行い、夜間訓練への合意を頂きました。10月17日、消防署、地域消防団、自主防災組織の区長9名の方々の立ち会いの下で地震想定での夜間避難訓練、並びに職員参集訓練を実施しました。約30分で市内の職員は集まり、停電想定の中、全利用者を安全に避難させることができました。しかし70人（95%の方が車イス利用）に対し、4人の夜勤者のみで初動の避難介助を行う困難さも明らかになりました。訓練の実施で気づいた事をさらにマニュアル案へ落とし込む予定です。

図 19 愛隣館の台風対策マニュアル

① 台風進路予想・大雨の情報収集

- テレビ・ラジオ・携帯電話・防災無線等で情報の収集
- 岩野川、菊池川の状況把握（随時）

②施設内外の台風等対策（事前準備）

<室内>

- 台風接近の半日前には浴室に水をためる
- 各トイレにポリバケツを準備し水をためる
- 発電機2台、灯光器3機準備をする
- 居室のベッドを窓から離す
- 居室のカーテンを閉める
- 保存食と飲料水の確認・確保
- 福祉避難所準備

<外回り>

- 飛びそうな物は室内に入れる
- 室内に入らない物はロープ等で固定する
- 倒せる物は地面に倒し飛ばない様にする

③台風など（災害時）

- 戸外に出ない、窓を開けない
- 必要時は施設内で避難

停電発生

- 施設長に状況報告
- 携帯電話、ラジオ等で情報収集
- 発電機から各号館の廊下に灯光器を照らす
- 20～30分ごとの巡回をする

建物破損（窓ガラス等）

- 施設長に状況報告
- 利用者の安否確認
- ガラスの割れた居室の利用者避難誘導
- 破損個所の応急処置

④台風など（災害後）

- 利用者の最終点呼
- 施設長に最終現状報告
- 居室内、内施設、施設外の破損確認
- 施設内、施設外の後片づけ、清掃
- 地域被災者支援

（2）大規模地震（夜間職員4人体制の場合）

図20は、予報がない大地震の場合のマニュアルのフローチャートです。

図20 愛隣館の大地震対策マニュアル

地震発生

- ☆震度5強（サブチーフ以上集合）
- ☆震度6（全職員集合）・被災・道路寸断除く

①地震がおさまるまで待機

- 自身の安全確保（ヘルメット、靴、懐中電灯、携帯電話）

②—1 状況把握・連絡（1名）

- 情報の確保（ラジオ付懐中電灯所持）
- 館長（副館長）へ電話→館長より理事長へ
- 緊急連絡網LINE等発信判断
- 出入口の開放
- 利用者・職員名簿携行

②-2 安否確認 (3名)

- 各号館利用者安否を至急確認
- 利用者身体保護・声かけ
- 利用者のケガの確認
- 応急手当→看護→搬送判断

③ 避難準備

- 避難場所の確定(食堂・集会室、前庭・中庭)
- ヘルメット(防災頭巾)の着用
- 立位歩行者は靴を履く
- 車椅子利用者は車椅子移乗
- ストレッチャー、ベッド等にて移動

④ 避難

- 人員確認 (利用者点呼)
- 一次避難所<食堂・集会室、前庭・中庭>
- 二次避難所<北側駐車場>
- 非常持ち出しリュック
(利用者・職員名簿、電池、軍手、保温用アルミシート、備蓄物のリスト 等)

⑤-1 安全確認 (建物・設備：2名)

- ライフライン(電話・電気・水道・ガス)
- 廊下、窓ガラス、天井
- スプリンクラーの誤作動対応

⑤-2 避難利用者ケア (2名・応援職員など)

- 安全確保
- 身体・精神的ケア
- 利用者との情報共有
- 非常用物資(水・食料・オムツ・毛布 等)

☆管理者が関係機関へ状況報告・救援要請等を行う

=====

(3) 防犯マニュアル

2016年7月26日に、相模原市の障害者施設で凄惨な犯罪が起こったことから、防犯マニュアルも作成を開始しましたが、まだ原案の過程です。厚労省通知をチェックリスト化してチェックし、グループ討議、発表までを行いました。想定が難しく難航していますが、内容をスリム化して実用化をはかりたいと考えます。研修後には、「防犯という意識を共有することが出来た」「職員同士がお互いの考え方を知る機会を得た」などの感想が聞かれました。組織として、緊急時にどう対応するか定着するよう訓練を重ね、夜勤者の心身の負担軽減をはかりながら、利用者の生命を守る私たち本来の使命を果たしたいと考えます。

8 つながり

今回、「普段のつながりこそ備蓄」だと痛感しました。平素から国・県・市の行政機関や身体障害者施設協議会、そして地域とのつながりを持っておくことがスピード感のある支援に結びつきました。また、これまでのつながりに加えて、新しいつながりを得ました。2017年には全壊した益城木山神宮を、国の伝統工芸山鹿灯籠で再現しました。この灯籠は一年山鹿大宮神社に奉納展示される決まりがあり、2018年夏に、主宰する奉納女性団体山鹿燈心会から益城木山神宮に奉納し、喜ばれ新聞記事となりました。

「地震がなければ出会えなかった」「地震は悪いことばかりじゃなかった」と言われ、これからもこのつながりを大切にしようと感じています。つながりというのは、携帯電話等で直ぐに連絡を取り合える関係性で、障害福祉の関係者だけでなく地域との多様な関係性と考えます。

参考文献

1. 三浦貴子. 95 回の支援物資配送と 50 会の温泉リフレッシュ支援を終えて. 愛隣館通信 あいめーる 2016 年夏号.
2. 三浦貴子. 防災 (火災 風水害 地震)、防犯マニュアル策定と改定の過程. 愛隣館通信 あいめーる 2016 年秋号.
3. 三浦貴子. 仮設団地、移動美術館と種々おもてなし. 愛隣館通信 あいめーる 2016 年冬号.
4. 三浦貴子. この 1 年に感謝を込めて. 愛隣館通信 あいめーる 2017 年春号.
5. 熊本地震から 1 年. 愛隣館通信 あいめーる 2017 年春号.